



雲悠山妙泉寺



みひかりの 御手にいだかれ
安らげく 一日送りぬ
おもむろに おとづれわたる
夕ぐれの鐘 夕ぐれの鐘

北谷愛枝作「夕の鐘」より

いあいさつ

雲悠山妙泉寺 住職 楠 義見

雲悠山妙泉寺は、去ること寛永十四年、開基覺榮によって赤坂に創建され、門信徒と共に聞法道場とし念佛繁盛のため精進してきました。

そして、元禄七年、第四世教授によって現築地へ移って、約三百年の今日まで護持発展に努力してまいりました。

しかし、関東大震災で焼失してより仮本堂にて六十有余年、

門信徒の佛法弘通並びに地域社会に貢献してまいりましたが、

本堂、墓所等が老朽化したため、この度心の安らぎの道場とし、

又地域のためにも役立つ妙泉寺ビルを新築し、一、二階は店舗、三階は庫裡、

四階は新しく荘厳された本堂、五階は近代建築に即応できた青空墓所、

その上に新しく鐘楼に梵鐘を設けた寺院として落成し、

ここに落慶法要を厳修すること相成りました。

これ一重に門信徒並びに関係各位のご厚情の賜と、深く感謝いたします。

この上は、多くの人々の精神的安定と心の交流を念佛弘誓のための道場として努力精進してまいりますので、皆様のご助言、ご協力を心よりお願い申し上げます。

平成三年十月十三日



妙泉寺本堂の落成を祝つて

西本願寺元総務
全国教誨師連盟理事長
堀 定雄

この度、妙泉寺さまのご本堂の新築が美事に円成されましたこと、同門の一人として心からお慶び申し上げます。親鸞聖人さまは、「浄土和讃」のなかで、次のように、お浄土の莊嚴を讃嘆しておられます。

七宝講堂道場樹

方便化身の浄土なり

十方来生きわもなし

講堂道場礼すべし

このお浄土の姿がそのまま妙泉寺さまの新しいお御堂に映し出されているのであります。「十方来生きわもなし」と仰せられた聖人さまのお言葉に随つて、有縁の皆さまが、念佛を中心とする弘教の道場として、末永がく護持されることを衷心から念願して止みません。

私の慶讃の心を次の詩に託しました。

祝頌

円成伽藍輪奐新
多年翹思瀝丹心
弘教潤生萬世燦
妙泉精舍瑞氣滿

竹哉老衲

お祝いのことば

国府台女子学院校長 平田 博永

私の家は、代々眞宗の家の住職でした。故郷山口をはなれて久しく、今は妙泉寺さんに籍を置かせて頂いております。妙泉寺さんは寛永十四年赤坂に開創されたといいますが、まさに江戸開府間もない頃のことです。その頃は戦国の世も終り、動乱に傷ついた人々の心を癒やそうとして、さかんに各地に寺が建てられたのであります。

妙泉寺さんは、才十五代義見師を迎えて、自信教人信の教えが実り、ここに伽藍が新築されました。心からおよろび申し上げます。私は蓮如上人の「われは門徒にもたれたり」というおことばを思いだしております。信心篤きご門徒衆の情熱が、正依二報の莊嚴を成就されて、今日を迎えられたことまことにありがたいことです。

今後ますます念仏相續されて、妙泉寺さんを拠点として、思想混乱の世に、真に信心の灯を掲げて進まれるであらうことを信じて疑いありません。

心から落慶をお祝い申し上げます。

義なきを義とす

元東海大学教授
文学博士
石田 瑞磨

親鸞が好んで説いたものに、「他力には義なきを義とす」という言葉がある。

弟子宛の手紙のあちこちに散見できるし、

『歎異抄』では、これを一種、標語のようにさえ扱って、親鸞の思想、信仰を代表させている。

ここでいう「義」とは計らいということである。わたしたちの浅薄で愚かな計らいをさす。

その計らいは賢しらと一枚である。阿弥陀仏の本願の救いの前では、邪魔にこそなれ、何の役にも立たない。なぜなら、その計らいは自力であって、仏の本願の他力と相反するものだからである。

自分の力で、あたくかぎりの修行を積みかさねることができぬなら、その道を選ぶ方がいい。

しかしそれができないから、仏の救いの手に触れたいと願ったはずである。

しかしここで注意したいのは、自分から手をさしのべて救いの手に触れようと努めることが、賢しらの知恵によるかぎり、ことは同じである。救いの手に触れるのは、仏の側からののはたらきによって触れるのでなくてはならない。親鸞はこのことを仏が与えてくださる、仏の側からの回向だと表現している。救いを信じ、念仏するのは、仏のはたらきにより信じさせられ、念仏させられるからなのである。否でも応でも人は時の流れによって老いていくように、

仏の手に身をまかせることが「義なき」「義」なのだ、と知られる。

妙泉寺をふりかえつて

別院寺中妙泉寺に、木仏と寺号が、寺社奉行所から御免になったのは、寛永十四年（一六三七年）九月二十日のことです。

その当時、幕府の寺社奉行の系列の下には、神宮、僧侶、山伏、樂人、囲碁將棋役などがありまして、すべて免許をいただくことになっていたようですね。留役組頭という、うるさい役柄の人が居たりして、その輩下の留役ともども、神社の神官とか、寺の僧侶などに、にらみを利かしていたようです。

前日の九月十九日に、江戸赤坂村に於て、妙泉寺が創建されていますが、その創建には、開基者の覺榮さんの努力があり、また、本山高僧の手腕があつたようです。

また、寛永十四年という年は、一つの大きな狙い目の年でありまして、九州に島原の乱がおこつた年です。天草四郎がもちあげられていきます。きびしいキリシタン弾圧が始まりますね。幕府は手を焼きます。

江戸城の周辺には、少しづつお百姓さんが増加し、田地田畑も開拓されていきましたから、どうしても、人名簿が必要で、人の動きも人の心もまとめなければなりませんから、お寺の創建がぜひとも必要だったのです。幕府は、鎖國の完成にむかつて、寺社奉行に命令し、着々とおひざ元をこまかく固めていきます。豊臣の残党もひそかにチエックしています。

私

詩人 長谷川 龍生

が、の想像では、いや、古い絵圖を見た記憶があります。赤坂村は、せまい谷間にひらけていて、水はけが溜た。方に都合よく入り、のどかで、雲雀が鳴いていました。ざくゆたかで整備された土地柄です。山手の方には、山さらの樹木がそろっていました。

から、元禄七年（一六九四年）二月二十四日に、創建して、五七年の歳月がながれて、現在の築地の地に移転埋立されたのです。江戸の町がふくらんで、人口も増え、築地が海岸の方に少しづつ、できあがっていきます。いっ地は、その名称のとおり、土地を盛りあげて固めて盤沈たのですが、その工事をすすめる以前に、若干の地えて下と、侵蝕があつたかもしれせん。風水害にそなし、埋立てをさかんに敢行したのですね。

七年かし、いちばんの拡張の因は、明暦の大火（一六五戸の）、いわゆる振袖火事で、江戸城本丸も焼失し、江戸町の再開発、再建が、急ピッチに行われたからでし火事。そのあと、天和二年（一六八二年）に、江戸の大火には、いわゆる八百屋お七の火事があります。災害の後う、町が新しくふくらむ、その定石をいったのではありません。江戸の大火は、寛政六年（一七九四年）にもありまよくよく燃えますね。

つて、妙泉寺の古文書には、慶安五年のお触書がのこ

号を調べてみると、慶安五年は、承応一年で、かさなっているのですね。この一枚のお触書は、慶安四年に陰謀発覚した由比正雪の乱と、関係があるかもしれません。移転する以前、つまり、五十年のあいだ、江戸は、まだまだ物騒で、油断のならない町だったのです。

ところで、移転してきた元禄七年と言えば、徳川綱吉という五代將軍が、生類あわれみの令なるものを頒発して、犬をかわいがり、野犬を收容します。江戸の郊外に大きな犬小屋をつくったのですが、たぶん、群員だったでしょう。築地の方にも、野犬が、たくさん、群れさまよっていたでしょうね。四世であった教授さんも、さぞ困ったことでしょう。なにせ、築地の埋立地ぜんたいには、妙泉寺が移転してくる以前に、ほとけさまになった人々が、たくさん、埋められていた形跡があります。江戸に働きに出てきて、人知れずくたばったり、不幸な災害にあった数多くのほとけさまたちだったのです。

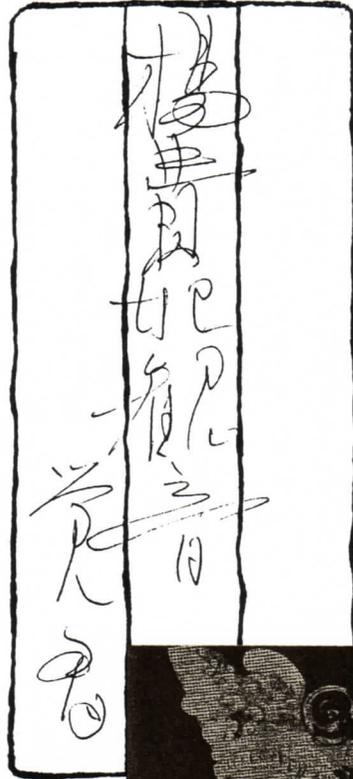
移転してきた妙泉寺は、奇しくも、江戸の町をどこかの一角でつくり、働き、支えてきた名もなき人々の上に再基したのです。犬公方さまが独裁ぶりを發揮していますが、四世教授さんは、江戸庶民のために、供養一途の働きをしたのです。

また、俗に築地の門跡、西本願寺は、江戸名所図会で見えますと、じつに堂々たるもので、その地域もひろく、江風山月樓といわれた稲葉正勝の別荘と相對して、決してひけをとりません。明歴四年（一六五八年）大火のあとすぐに、現在の横山町二丁目の地から移転してきたと記されています。この西本願寺が移ってきて、日日の参詣の人波が、どっと増えてきたの言うまでもない

でしょうね。もう一度、おさらいをしますが、この西本願寺の移転のあと、二十数年経って、妙泉寺は、赤坂村からこの築地の埋立地に移りついてきており、未寺としては、近接、有利だったことであると、十分に察せられます。

時代はながれていきます。鎖國から開國へ。佐幕から勤皇へ。明治のご一新は、西郷隆盛と勝海舟の見事な対決によって、江戸の大火は救われます。しかし、大正十二年（一九二三年）の関東大震災で、東京は壊滅します。その後、すぐさま復興、昭和に入って、太平洋戦争となり、アメリカB二九の初空襲（一九四二年）を受けて、被害の日々は、終戦（一九四五年）までつづきます。苦難の歲月だったでしょうね。さて、築地の土地柄というもの、そのつど、そのつど、一変につぐ一変、さまがわりをつづけましたが、妙泉寺そのものは、ひたすら、静かに、この地で法会をいとなみ、東京の土地からはなれていく壇家を手がたく守っていたのですね。

創建の日から、三百五十余年の歲月、築地のこの地へ移転してきてから、三百年の歲月が、ゆうにながれています。現任職は十五世義見さんです。この義見さんの平成の時機に、都市再開発のさまざまな問題がおこりました。しかし、もろもろの困難を見ごとに克服して、先達の法師さんたちが予想もしなかったほどの、新しい妙泉寺が落慶相成ったのですね。じつに目を見張るばかりです。活性化している野外中央市場につつまれて、妙泉寺は、すつくと、背を高くしています。鐘樓の肌がひときわ美しく光っています。



「三年の歳月が流れて、
妙泉寺さまに納まることになった
私の画によせて」

聖観世音菩薩

(京都市東山区泉涌寺楊貴妃観音堂に安置)

デザイナー 秋山 多津雄

この仏像は楊貴妃観音と呼ばれ今から千二百年前、中国の玄宗皇帝が皇后楊貴妃を追慕して造られたと云われます。

お姿は木造極彩色、等身坐像で豪華な三重の宝冠、着衣等唐朝文化の粋を伝え、そのふくよかな顔、優しい眼差しは、慈悲の大願を秘め、あたかも生ける人に接すかの現実感の中に、どことなく近づき難い、神秘性をもつ美しい仏像です。

さてはたして、僕の画力がそこまで表現出来たかは、僕自身わかりませんが、唯々祈りをもって、描いたことはたしかです。

そして妙泉寺さまの下陣の一間に、かけていただけたことは、僕にとって最高の幸せです。 合掌

妙泉寺さん完成までのことなど

梅田 妙泉寺さんが赤坂村からこの築地に移ってきから三百年近い歳月が流れていますが、ここ百年を見ても、明治維新における神仏分離の政策による仏教排撃運動やら、大正十二年の関東大震災、そして第二次世界大戦と多くの試練を経てきたわけですが、この度の再建にあたってどんな印象をもたれましたか。

吉田 私の叔母の紹介で妙泉寺さんに初めてお伺い致しました時は、築地の場外市場に仕入れに来る人々の雑踏と騒音の中で、取り残されて息を潜めて居るかの様に遠慮がちに、それも俗に言う「軒先を貸して母屋を取られる」の譬の様に、店子の商売に出入口を狭められ、うっかりすると見過ごしてしまう様な佇まいのお寺でした。

梅田 そうですね。入口がどこか迷ったものです。建築的にはお寺の建物はどんな感じだったのでしょうか。又仏様もひっそりとおまつりしてあったようにおもいますが。

吉田 本堂は普通の住宅と同じ造りで、間口二間、奥行き三間半程の戦後の復興時を思わせる質素な老朽化した建て屋でした。

共信建築事務所々長 吉田 修
坊守友人 梅田万紗子



正面の御厨子に安置された阿弥陀様は、妙泉寺の三百有余年の歴史と歳月を物語るかの様に、静かな眼差しで見守っておいてなのが申し訳なく感じました。この御像を、地震や、災害と何時も背中合わせの中で長い年月お守りして来られたお寺のご努力に対し、報いられる様賢大な建物にして差し上げられればと思いました。

梅田 東京は墓地が足りなくて困っているようですが、妙泉寺さんの墓地も狭かったですね。

吉田 一五坪足らずの処に七―八十基程の墓石が肩を寄せ合う様に時間を止めて立っていたのが印象的でした。

梅田 「肩寄せあつて」という言葉がびつたりでしたね。最近の築地市場は、大田区に一部を移転したり流通の形態が変化したりで少し活気が無くなったと言われていますが、朝の活気をみるとそうはおもえないのですが。

吉田 私もそうおもいます。何といつても東京の胃袋の供給源として厳然たる地位を築いた人達は自負していると思います。

梅田 かつての寺町とはいうものの、現状で妙泉寺の建て替えの可能性については、どうおもわれましたか。

吉田 私はこの限られた商業区域の中の一遇

を占める立地は充分稀少価値を持っていると思えました。一階は従来通り三店舗に入つて貰い一階の一部と二階を貸店舗、事務所として収入源とし、これによって安定した事業計画を確保出来れば、充分建て替え事業の可能性が有るものとおもいました。

梅田 しかし、お寺の建築となると資金調達等難しいことが多くあるのではありませんか。

吉田 普通金融機関では宗教法人には融資をしてくれません。本来なら何年も掛けて御檀家の方々が浄財を集めて、それから計画に着手するのが普通なのですが、建築費の上昇と、お金を集めるのが追いつかないのが現状です。

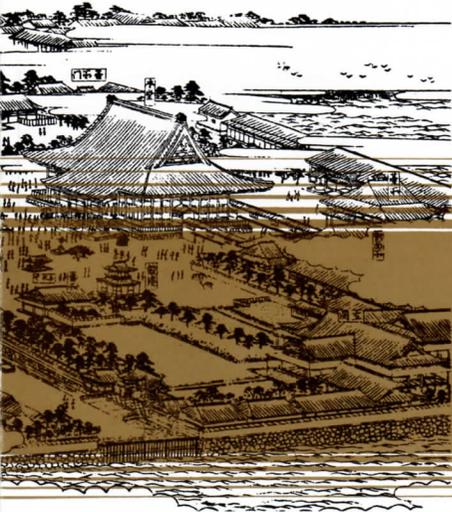
梅田 すると計画の第一歩はまずお金集めと言うことですね。

吉田 そうです。金融機関は、どんな建設計画もそうですが、この場合は、特に複合的に捉えて、建設資金の長期返済計画の源資の確保と其の整合性が問題でした。基本的には、大家業による収入を確保すること、御檀家の数を増やす事だと思えました。

梅田 御檀家の数を増やすことも又難しいことですね。

吉田 そうです。他の宗派ですと、加持祈禱とか法難除け等、色々な形で檀信徒を集め

西本願寺



ておりますが、妙泉寺さんの場合はその方法はまったくとれません。此のお寺の場合は墓地面積を広くして、墓石の数を増やし、新たな御檀家を増やす事しか出来ないと思えました。

梅田 ということは、御檀家にご協力いただくことが大変重要になりますね。

吉田 その通りで、前にも触れましたが、建築費と浄財との関係から、先ず御檀家の皆様に喜んで頂けるお寺を建立し、その価値を評価して頂いた上で浄財をお願いしたいと考えました。

梅田 建築的には、築地の商業地区の真中に寺を建てるということは面白そうですが、何か閃きがありましたか。

吉田 建築は複合的に必然を積み上げて、寺院としてのイメージをデザインできれば良いと考えて居ました。まず墓地をどこに配置するかが問題でした。初期の段階では、ヨーロッパの寺院の様に地下にしようかと考えましたが、墓石の上を人が歩くことに不快を感じ、重量的には大変ですが、墓石75トンを屋上に持つていくこととしました。防水層の上を二重スラブとし、中間がカーポートとなっています。墓地面積の拡大も出来、三十基程の増設も可能になりました。

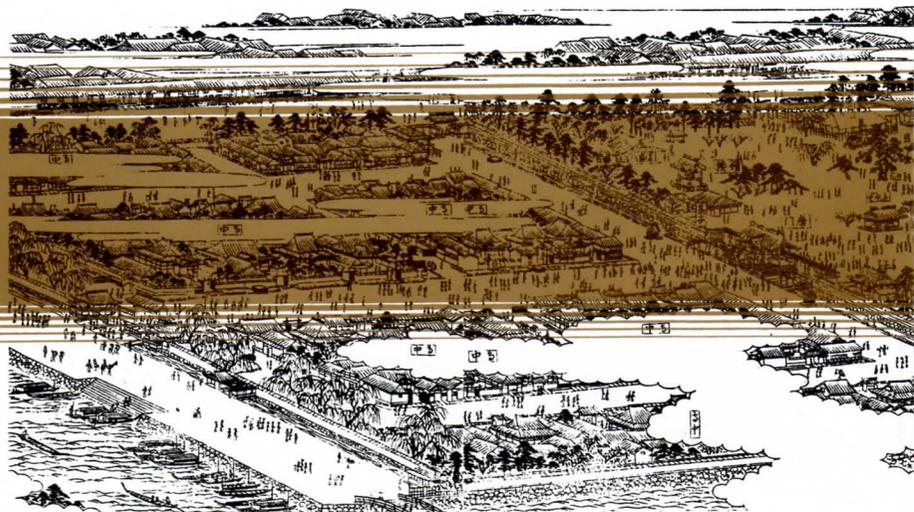
梅田 墓地が屋上で自然の気の中にあるの

はいいですね。又その上の鐘楼ですが、都心のお寺で鐘楼があるのはとても珍しいのではないのでしょうか。

吉田 そうです。中央区には、西本願寺を含め本格的な梵鐘はありません。寺のイメージとしても是非とも鐘楼が欲しいと思えました。四五〇貫の梵鐘を高岡の老子さんに铸造してもらい、エレベーター・シャフトを利用して鐘楼まで引き揚げ取り付けました。除夜の鐘を待つこととなりましたが、世俗の煩惱を晴海の沖へ、梵鐘の音と共に飛ばしてくれればと願っています。

梅田 私も梵鐘铸造供要には、高岡までお供したのですが、御住職のお経、お焼香につづき、にえたぎった銅が、鑄型にそそぎこまれる様は荘厳そのものでした。手をぬかず、ひとつづつ真心こめて準備を進めておられることをよろこばしくおもいました。さて、本堂はどのようなイメージなのでしょうか。

吉田 既存の本堂は、東を背にして阿弥陀さまが配置されておりましたが、東側の旧河川敷きの採光を重視して西側前面道路からの道路斜線により内陣のお厨子の上が屋根となる事を利用し、東向きの本堂としました。下陣は15畳間と10畳間二間続きの構成で35畳の広間としても使える様計画しました。内陣は唐戸面極彩色合天井とし、来迎柱を本漆金箔仕上げとし斗組も極彩色でまと



めました。

梅田 私もめつたに見られないことですので
本堂内陣の完成を順次拝見させていただきました
ました。お厨子其の他は若林佛具さんが準
備されたようですが、たとえば内陣の来迎
柱ひとつをとりましても、仕事の手順に合
わせ京都から職人の方々が上京され、白木
の柱がまず塗師の矢鳥さんの手によって、
うすめたるうして下塗をされ、続いて、ろ
いろ師の竹田さんが生うるしをその上にか
け、鹿の角を粉末にしたものを掌につけ、
手を道具にしてみがきあげていく大変な作
業なのです。

吉田 まさに手工芸そのものです。

梅田 この様に仕事をする方が順次人のし
た仕事の上に自分の仕事を重ねていく、気
をゆるせないというか、まっとうな仕事
がそれだからこそ生かされていくのがよくわ
かりました。来迎柱は山村さん親子の手に
よって金箔がおかれ、内陣の荘厳さをさら
に増していますね。

斗組の彩色には天井の花々をかかれた絵
師の今井さんが上京され、色をさしてい
かれました。天井の絵は一枚づつ表具師の長
沢さんがはってば完成というわけですね。

みえない部分に沢山の職人のわざが重
なりあっているのが拝見させていただき、よ
くわかりました。

梅田 建築のことになりますが、特殊な商業
地区なので工事は大変だったのではありま
せんか。

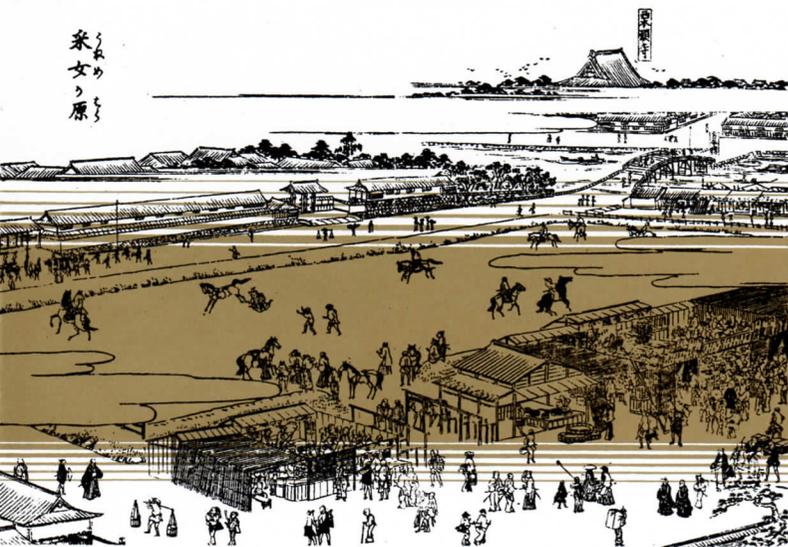
吉田 商店の開店時間が、朝の三時頃から昼
の二時頃までと特殊な時間帯なので、工事
に伴う資材の搬入が大変でした。

梅田 工事中に敷地からお骨が沢山でてきた
とのことですが。

吉田 既存の墓地を撤去しました時に、多分、
大正十二年の関東大震災の時の無縁仏の遺
骨と思いますが、吠にして80袋程出て来ま
した、お骨は其の処置が難しく行政側でも
対応が出来ません、そこで大きな骨壺を瀬
戸の藤森兼明さんに製作してもらい、地表
から5メートル下の基礎の間に十五基の壺
に分骨し写経と記念品を封入し埋葬して
もらいました。

梅田 納骨堂の前にあるあの壺が記念に一つ
残されたわけですね。御住職が一つ一つに
「俱会一処」と丹念に書かれ、焼きあげら
れたもので、私も瀬戸行きにお供させて貰
ったのですが、ここにも細かいお心遣いを
感じたものです。

納骨堂の中に、阿弥陀様がおまつりして
あり、蓮弁が一〇八枚一枚づつに法名が書
きこめるようになっていて、おまいり出来
るのはとてもよい考えですね。



浄土堂
衆女原

吉田 納骨堂は考え、工夫しました。阿弥陀様の台座に三部経の一部が刻んであります。

「輪藏」とか「まに車」にヒントをえまして、蓮弁が動くようにしてあります。それぞれの家の蓮弁を前にして、おまいりできるようにしてあるのです。

梅田 其の他工事中に何か重要な事は有りませんでしたか。

吉田 店子の移転先が決まらず工期が一年延びた事でお寺やお檀家関係者の方々に御迷惑をお掛け致しましたが、無事竣工し落慶法要を迎えられて大旨80%は完了したと思っております。後は貸し室が決まる事と墓地が売れてお檀家が増える事が私にとって最大の希望です。

梅田 私は、住職夫人と女学校の同級生という縁から、昭和六十一年に計画が始まり平成三年のこの落慶の日までの長丁場を、ひとつひとつ拝見させていただいて、とても幸せにもっております。梵鐘の音がそこで生活している人、それぞれに生活の句読点となりよろこばれるようお願いしております。



設計—株式会社共信建築事務所
施工—長野建設株式会社

8.9.10.11頁の絵図は「江戸名所図会」角川書店を出典とさせていただきます。
1.7頁のイラストは「日本の文様・花鳥」淡交新社を参考にさせていただきます。

妙泉寺歴代

開基	覺栄	延宝二年九月十九日寂 (一六七四)
二世	理天	天和二年十二月三十日" (一六八二)
三世	廓翁	元禄四年四月六日" (一六九一)
四世	教授	正徳三年六月四日" (一七一三)
五世	宗順	元文元年二月二十五日" (一七三六)
六世	了掌	宝暦七年十月二日" (一七五七)
七世	亮誠	宝暦十年二月四日" (一七六〇)
八世	了空	文化三年四月二八日" (一八〇六)
九世	惠空	文政十一年一月十八日" (一八二八)
十世	亮瑞	天保十三年九月二日" (一八四二)
十一世	元瑞	天保十五年一月十一日" (一八四四)
十二世	元敬	明治二九年七月九日" (一八九六)
十三世	敬順	大正十四年二月十三日 (一九二五)
十四世	宜正	昭和四十一年六月八日 (一九六六)
十五世	義見	

寛永十四年九月二十日 別院寺中妙泉寺・木佛寺号御免
 寛永十四年九月十九日 開基覺栄江戸赤坂に於て創建
 元禄七年二月二十四日 四世教授現在地に移転